

Title	On the Road to Heaven : Jack Kerouac's Quest for Death
Author(s)	山住, 勝利
Citation	大阪大学, 2003, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/44187
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、 〈a href="https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed"〉 大阪大学の博士論文について 〈/a〉 をご参照ください。

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

氏名	山住勝利
博士の専攻分野の名称	博士（言語文化学）
学位記番号	第 17954 号
学位授与年月日	平成 15 年 3 月 25 日
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 1 項該当 言語文化研究科言語文化学専攻
学位論文名	On the Road to Heaven : Jack Kerouac's Quest for Death (天国への途上—ジャック・ケルアックによる死の探究)
論文審査委員	(主査) 教授 仙葉 豊 (副査) 教授 広瀬 雅弘 助教授 里内 克巳 助教授 森 祐司

論文内容の要旨

本論文は、Beat Generation の作家 Jack Kerouac (1922-69) の小説 *The Town and the City* (1950)、*On the Road* (1957)、そして *Visions of Cody* (1972) の読解を通じて見えてくる、彼による死の探究の変遷を考察するものである。これら三作品は、出版年の隔たりはあるものの、書かれた時期からいえば、処女作、第二作、そして第三作といふことになる。三つの小説の各中心人物はいずれも死の問題にとらわれており、ケルアックの小説が自伝色の濃いことを考えるなら、彼は死に対する自身の執着を小説中に投影したのだといえよう。死に対するケルアックの執着は、従来の研究においても指摘されてきた。ケルアックが抱える死の問題に関して、たとえばケルアックの自伝研究では、彼の兄 Gerard の夭逝や父親 Leo の死が彼のその後の人生に影響を及ぼし、その影響が作品にも反映されたことを強調する。確かに、ケルアックの作品を読めば、そのような影響関係を読み取ることは可能であり、また、いかに彼の実人生と作品が重なり合っているかを知ることができる。しかし、創作活動の過程においてケルアックの死に対する態度が変化していったことにまで言及し、その点について考察する研究は皆無であるといつてよい。上記の三作品を通読するなら、とりわけ『オン・ザ・ロード』（以下『ロード』）と『ヴィジョンズ・オブ・コディ』（以下『コディ』）におけるケルアック自身をモデルとした語り手の、死に対するとらえ方の変化に気付くであろう。その変化は、小説の自伝的側面からいっても、作者であるケルアックの死生観の変化を映し出しているのだと考えられよう。本研究は、そのような変化を巡る考究によって、従来着目されることのなかった、ケルアックによる死の探究の有り様を浮き彫りにする。

本論文は、『町と都会』、『ロード』、『コディ』をそれぞれ分析した三つの章を中心に構成される。以下に各章のアウトラインについて述べたい。

第一章の第一節では、考察の出発点としてまず、ビート・ジェネレーションとケルアックの関係に言及する。ケルアックが名付けたビートは、彼の『ロード』出版によって 1950 年代後半のアメリカ社会で一時的流行のような現象を生んだ。ビートは道徳に反する暴力的な若者集団というイメージで社会に受け取られたが、ケルアックはそのようにイメージに強く反発を感じていた。なぜなら、彼自身はビートを神聖なものとして捉えていたからである。そしてケルアックは、故郷 Lowell の教会の中で啓示的に現れた “beatific” という言葉によってビートを定義付ける。その

ような定義付けは、カトリック教徒であるケルアックの宗教的背景が反映した個人的なものといえる。その点から、ケルアックがピートを、ある年齢層の複数の人間で構成される世代というよりも、あくまで個人的なものとして考えていたことがわかる。ケルアックのピート定義は、世間の誤解を解消するために考え出されたのだと解釈できるが、しかし、その定義に見られる宗教性は、『町と都会』、『ロード』、『コディ』三作品の執筆の過程におけるケルアックの死の探究を経て全面的に現れたのである。どのようにして現れるのか、第二節以降で探っていく。

第一章第二節で明らかにされるように、ケルアックは処女作『町と都会』で不可解な死という主題を中心人物 Peter Martin を通して提示している。この小説は、三人称の語りを使った月並みな作品ということで、これまでのケルアック研究では軽視されてきたけれど、ケルアックが死の問題を取り上げた第一作という意味では極めて重要である。Massachusetts の Galloway という架空の町で暮らしていた Martin 一家が大恐慌と第二次大戦の影響によって根こそぎにされるという本筋の中で、ひときわ印象に残るのがピーターの死に対する執着である。それは、戦場での大量死や、親や友人といった身近な者の死に彼が遭遇したことが直接的な要因となっている。そのような体験が死に対するピーターの意識を高めたことは容易に想像がつく。小説の後半部で描写される、釣竿にかかった魚に死のイメージを投影するピーターの姿から、彼の名前がキリストの十二弟子のひとりで漁師のペテロにちなんでつけられていることが暗示されるけれど、死に関するピーターの執着は、キリスト教における罪 (sin) に対する刑罰としての死というような抽象的・精神的なものに原因しない。ピーターがこだわるのは具体的な死そのものであり、それゆえ死は彼にとって意味づけできない不可解なものとなるのだ。ケルアックがこの小説で表現するのは現実世界における死の了解不可能性であり、それは『ロード』に引き継がれる問題となる。

第二章は、『町と都会』で提示された死という主題が『ロード』においてどのように展開されていくのか探る。ピーターが西へ向かってひとり放浪の旅に出発するところで終わる『町と都会』と『ロード』の接点は、『ロード』の語り手 Sal Paradise がアメリカ大陸を放浪するところに見出せる。さらにサルは、ピーターと同様、死という問題について考えあぐねている。サルが執着する死は、やはり現実の死であり、精神的なものではない。サル・パラダイスという名については、サルを救済 (salvation)、パラダイスを楽園として解釈できるだろうが、だからといって、彼が抱く死に対する疑問は解消されるわけではない。それゆえ、サルの旅は、自分の知識の範囲を超えた「外部」へ向かうことになる。死そのものが「外部」にあるのだから。

第二章第一節では、「内部」と「外部」をキーワードにして、『ロード』に描かれるサルの、死の意味を探る旅について考察する。ケルアックは、この小説で、支配的な白人中流階級社会 (=「内部」) とそこから排除された世界 (=「外部」) に明確な境界線を引いている。サルは、「内部」に属する白人青年である。彼が執着する死は、さまざまなマイノリティを超えた、究極的な「外部」であるといえよう。20世紀の「内部」社会は、少数民族を周辺に追いやるだけでなく、自らが負うはずの死をも「外部」として排除したのである。「内部」人であるサルはいくら「外部」に向かっても、マイノリティの社会に同化することも、ましてや死ぬこともできない。サルの旅から見えてくるものは、「内部」と「外部」の境界線であり、両者が断絶しているということだ。ケルアックが『ロード』を通して表現する死の探究は、『町と都会』と同じく、あくまで現実的な死の問題という水準にとどまっている。

『町と都会』と『ロード』の分析を振り返って気付くことがある。それは、ケルアックが二作品の中心人物あるいは語り手に彼の民族的背景を投影させていないことである。第二章第二節では、なぜ『ロード』の語り手サルが、それ以降の小説の語り手のようにケルアックと同じフランス系カナダ系アメリカ人ではなく、イタリア系アメリカ人に設定されているのかについて、アメリカ移民の歴史を参照しながら論証する。確かにケルアックとサルの共通点は多く、従来の研究ではケルアック=サルと捉える傾向が強い。だが、両者の民族的相違点に注目するなら、ケルアックがサルと距離を置くことで、死の探究を、カトリックに影響された宗教的視点からではなく、現実的な視点からおこなっていることが理解できるだろう。ただし、ケルアックが『ロード』で宗教的側面を『町と都会』以上に強調していることは無視できないが。

第三章は、ケルアックの実験的小説といわれる (それゆえ死後出版となった) 『コディ』における彼の死の探究の変化を検討する。『ロード』において伏線としてあった小説の宗教性は、『コディ』で語り手 Jack Duluoz がケルアックと同じフランコ・アメリカンとして設定されることによって、より濃密になる。『コディ』は、ケルアックによる宗教的小説として読むことができるだろう。

『コディ』は、ケルアック自身が認めるように、『ロード』の拡張版であるのだが、それ以前の彼の小説とちがって、時間軸に沿ったストーリーの展開を有していない。小説中にあるのは、デュルオーズの、友人 Cody Pomeray を巡るイメージや回想の断片といえるものである。そしてデュルオーズは死の問題に執着しており、その不可解さからは逃れられないことを悟っているかのようなのである。しかし、彼は死の問題を解消するかのようにも見える。それは、ケルアックが過去から未来に向かって流れていく従来のストーリー展開を『コディ』において拒否したことに関係する。ケルアックがこの小説で描こうとするのは持続時間の中で生成する出来事ではなく、永遠としての「今」という常に現在形の世界なのである。死を、時間を超越した永遠のものとして捉えるなら、死は「今」と表裏一体である。もちろん死・「今」の描写は、持続する時間を越えない限り不可能なことで、それができるのは時の創造者の神だけである。だが、『コディ』でケルアックは、心の中で直感的に湧き出る言葉の奔流を記述することによって「今」あるいは死を捉えようとしたのである。ケルアックにとってその試みは、すべてを知っている神への接近を意味するといつてよいだろう。あるいは、神が持っているにちがいない死に関する知を得るための試みであるといつてよい。

少年時代のケルアックは、カトリック信者による神への忠誠心は天国で報われるものだと考えていたらしいが（これは神から与えられる恩寵である）、彼が『コディ』で描くデュルオーズによる神への接近は、一見すると、神の絶対的主権性を侵害するもののように見える。キリスト教における啓示は、神から与えられるものであり、こちらから啓示を求めに行くことはできないからだ。そこでケルアックは、コディをデュルオーズと神との間に立つ、キリストのような、仲保者（Mediator）的存在とすることで、神の絶対的主権を保持しようとする。小説最後にデュルオーズは、“I not only accept loss forever, I am made of loss—I am made of Cody, too” というが、死の問題は依然として不可解なままである。しかし、『コディ』が示すケルアックによる死の探究は、『町と都会』『ロード』が持続する時間の中での探究であったのに対して、超越的・永遠的な時間のもとでの試みであると結論付けることができる。『町と都会』から『ロード』にかけてケルアックは死の探究を同じ地平で延長していき、『コディ』で彼は死に対する明らかな態度変更をおこなったのである。

論文審査の結果の要旨

本論文は、1950年代後半のアメリカに現れたビート・ジェネレーションの代表的な作家であるジャック・ケルアック（Jack Kerouac）を取り扱ったものである。飲酒や麻薬やジャズ、そして無軌道な放浪生活などを主題に、徹底的に既成の社会道徳に反発して、瞬間の感覚を頼りに書いたといわれるこの作家の通例の評価とは反対に、死と宗教的な側面に光を当てているところが本論文の特徴となっている。第1章では初期の自伝的小説である『田舎町と都会』（*The Town and the City* 1950）、第2章では代表作『路上』（*On the Road* 1957）、第3章では後期の問題作『コーディの幻想』（*Visions of Cody* 1972）の3つの小説を対象としながら堅実な構成で論を展開している。

第1章では、故郷のマサチューセッツ州ローウェルの教会で啓示的に現れた“beatific”（至福）という言葉からビート・ジェネレーションという世代の運動を概括した上で、『田舎町と都会』に頻出する主人公ピーターの周囲の「死」について考察している。親や友人など身近な人々が、戦争を背景として亡くなっていく情景の分析を通じて、「死」の了解不可能性と使徒ペテロの関連を論じている部分に新鮮なところがある。

第2章は、『路上』を中心とした分析である。語り手サル・パラダイスのイタリア系の出自を問題にして、第2次大戦後のアメリカの少数民族と、作者ケルアックのフランス・カナダ系アメリカ人という問題を浮上させている点が目新しい点であろう。従来の研究では、ケルアックとサルを同一視する見解が多いのだが、作者がなぜサルをフランス・カナダ系にしなかったのかを問うている点が興味深い。

第3章では、ケルアックの実験的小説といわれる『コーディの幻想』を宗教小説と規定して「死」と「時間」のテーマを追及している。過去から未来へと流れる連続的な時間ではなく突然現れてくる「今」のヴィジョンを、即興的なジャズの演奏と写生的な語りの問題として捉えなおしているところに著者独自の視点があると思われる。

山住氏の研究は、従来のビート・ジェネレーションのもつ反道徳性と暴力性の議論を超えて、新たな宗教的な側面のケルアックの諸特徴を、「死」のもつ意味への探求を中心として構成した斬新な研究であるといえる。言語文化学博士論文として相応しいものと認めるものである。